

第1章 地域と協働した子育て支援活動の意義と目的

第1節 調査・研究事業の目的

0～2歳児の84.4%が家庭で育てられており、在宅の子育て家庭がかかえる子育てに関する不安感・負担感は共働きの家庭よりも大きくなっている。在宅子育て家庭の母親の約半数が「自分が孤立している」と感じ、約2割の人は「相談する人がいない」と感じている¹など、在宅で子育てをする家庭のかかえる問題と厳しい現実に、身近な地域で子育てを支援する仕組みをつくることが重要な課題となっている。

地域社会に密着し、子育ての専門性をもつ認可保育所には、その機能を活かした地域子育て支援が求められている。一方、保育所の実態においては、待機児童の受入れや長時間開所への対応、気になる子どもの保育への取り組みなど、保育所を利用する子どものケアの充実が急務な課題となっている。こうした現状の保育所において、さらに地域子育て支援まで積極的に取り組んでいくためには、諸施策・制度の拡充とともに、保育所と地域の人材・関係機関等が協力し、地域の子育て家庭を支援する仕組み(プログラム)を研究・開発することが、地域子育て支援の充実にあたっては有効であると考えられる。

本調査・研究事業では、全国規模で主に0～2歳の子どもがいる在宅子育て家庭を対象に、その支援ニーズを把握するとともに、現状の子育て支援の取り組みをもとに

- ① 保育所と地域の人材が協力し、地域の子育て家庭を支援するための活動プログラム
- ② 地域社会にもっとも身近な児童福祉施設である保育所が上記の活動を支援するプログラム

を研究・開発し、保育所と地域が協働して子育て支援を行うためのシステムづくりに資することを目的として調査研究を進めた。

¹ (財)こども未来財団 『平成18年度 子育てに関する意識調査』

第2節 保育所にとっての地域子育て支援とは

保育所のなかには、定員を超えて子どもを受入れていたり、正規保育士数の減少などでぎりぎりの人員体制で保育実践に取り組んでいたりする施設も少なくない。そのような保育所にあっては、「地域子育て支援」という言葉を聞いたとしても、「通常保育で精一杯、地域子育て支援をする余力はない」あるいは「保育に欠ける子どもが第一で、在宅で育つ子どもまでは手が回らない」という思いを抱くこともあるだろう。

しかし、保育所には乳幼児期の子どもが一日の生活の営みを過ごす場であり、子どもの発達を援助する上でふさわしい物的・人的な資源がある。そこに地域の子育て家庭を支援する役割を担うにはふさわしいと思われる理由がある。それは、保育所が地域・在宅家庭の子育てを支援するということが、単に地域や在宅で子育てをしている保護者(親)の側から、子育てについての保育所の支援や専門性を求められるということにとどまらず、地域社会の伝承に連なることであるとの定義において、保育所が必要不可欠な存在・組織としてあらためて認められていくことにもつながる。

本調査を通じて、通常保育をもとにしつつ、地域子育て支援にも力を入れている各保育所の現場の生の声を把握することができた。これら保育所の実践からの思いや考えを紹介することで、本報告書の読者に、地域子育て支援の意味について、あらためて考える機会としてもらうとともに、次なる実践への展開を期待するものである。

保育所にとっての地域子育て支援とは何か、という問いかけに対して、発信された意見を紹介したい。



(1) 保育所による地域づくり

保育所は地域の一員であり、入所している子どもだけを対象とした「閉じた施設」ではありません。園児とその親だけでなく、広く地域住民に活用してほしいと考えます。地域の子育てについて保育所が関わりを持つことによって、保育所が「地域にとってかけがえのない施設」と見られるようになり、保育所の存在意義が強くなり共有されるようになります。地域を支えることで、保育所が地域によって支えられるようになるのです。

といっても、保育所が地域の子育てニーズのすべてを一身で引き受ける必要はありません。地域に子育てを支援する主体はいろいろあります。それぞれが特性を活かしながら活動をしています。保育所もその全体のなかの一員として、得意な分野を活かしながら取り組みを進めていきましょう。地域の人々はあなた方、保育士の持っている保育の知識を求めています。保育士が普段、何気なく行っている保育(養護と教育)が、実は地域の子育てにとってとても重要な役割を果たすのです。

そして、保育所が拠点となって、人と人とのつながりができると、保育がもっと豊かになり、家庭にとっても子育てのしやすい街になっていきます。

[現場からの声]

- 保育所の姿勢として、保育活動の3つの柱が「子どもの保育の実施・支援」、「地域の子育て支援」、「卒園児の支援」である。その一つの「地域の子育て支援」ということを活動の柱として、これまで地域の子育てを保育所として支援し続けている。
- 公立保育所は地域における共通の地域資源であることから、園児だけでなく、地域子育て支援を含め広く地域住民に使ってほしいと考えている。
- 子育ての責任をすべて保護者だけにゆだねることはできない。子育ては保護者だけの責任ではなく、保育所を含めた地域全体の責任であり、社会の構成員がそれぞれ責任を持って取り組むべきである。
- 保育所に通ってくる子どもだけではなく在宅の子どもも支援していくというのが行政の姿勢であり、制度的にも在宅子育て支援の体制が確保されている。社会福祉施設である保育所としての当然の任務である。
- 保育所として地域のために取り組んでいることが、結局は地域にとってかけがえのない存在となり、地域によって支えられる保育所となるためにも必要なことである。
- 保育所が子育てについてどのように努力しているかを地域の人に見てもらいたい。
- 保育所を起点として人と人とのつながりができることに意味がある。地域のつながりができることによって家庭や通常保育の中で経験できないような活動が増え、子どもたちがそれを楽しみ、保育が豊かになってくる。
- 保護者は働いていて地域との接点がなくとも、子どもを核にして地域とのつながりができている例もある。こうした機能も保育所の重要な機能である。

(2) 保育所による未来づくり

地域には、保育所の利用だけでなく、幼稚園や認定こども園などの施設を利用する子どもがたくさんいます。また、子どもの育ちは、保育所に入所している子どもにとっても、0歳から6歳までではなく、小学校に就学した後も続きます。子どもの成長過程の中で、保育所保育の対応している部分はその一部です。

地域子育て支援は、すべての子どもと子育て家庭を対象として、地域の子どもたちへの「横の拡がり」であるとともに、入所前の乳児や学童期も含めた時間軸の拡がり「縦の拡がり」でもあります。地域子育て支援は、明日だけではなく未来の社会をつくることであり、「未来づくり」という大きな流れにつながります。

[現場からの声]

- 「子育て」の捉え方はいろいろあるが、園児だけでなく18歳ぐらいまでの子どもを含めて支援するのが、本当の「子育て」であると考えている。そうした子育てを地域の中で、保育所としてどこまでできるのかこれまで取り組んできた。

- 保育所で見ている0～5歳の6年間だけでなく、長い目で見るのが保育士にとって大事なこと、という意味で次世代育成に取り組む意義がある。
- 次世代育成の視点から、異世代交流の重要性を感じている。
- 10年前に比べて保育所保育、とくに保護者対応との関係に難しさを感じる。今、次世代育成に取り組んでおかないと将来大変なことになる。目の前の子ども(入所している園児)だけでなく、横の拡がり(在宅の子ども)や縦の拡がり(小中高生など)も見ていく必要がある。

(3) 子育て支援を通じて保育所が得られること

地域子育て支援は、地域のため、未来のためという中長期的な実りだけでなく、より保育所に直接的な実りを生み出します。例えば前述のように、保育所が地域の子育て支援に関わることにより、「地域にとってかけがえのない施設」であると捉えられるようになり、保育所の存在や保育所保育が地域によって支えられるようになります。

実際に先進的・積極的な取り組みをしている施設からは、「地域子育て支援に取り組むことが、保育士や職員の資質の向上につながっている」、あるいは「地域とのつながりができることによって通常保育が進めやすくなっている」といった実感が伝えられています。

[現場からの声]

- 子どもの友だち関係、保育士とのかかわり、保育士同士の連携を地域に伝えていくことで、保護者と子ども、保育士の育成につながると考えている。地域との関わりは、「人間を見る」という視点を持っているかどうか重要
- 地域支援を担当した保育士は、その後クラス担任になって園児を連れて散歩に出ても、地域の人が声をかけてきてくれ、保育が豊かになる。保育所に対する理解も深まり、プラスのイメージを持ってもらえる。

(4) 保育所がやっていることの“おすそわけ”

在宅子育て家庭が求めていることは、保育所にとってまったく新しいことを始めることではありません。経験と専門性を持つ保育士が毎日やっていることや、あたり前と考えている知識のなかに、子育て家庭にとってはとても大事なこと、役に立つことがたくさんあります。園庭開放・保育所開放などで、保育士が保育をしているところを、在宅子育て家庭の保護者（親）に見せるだけでも、たくさんの情報を提供することができます。

それは、本やインターネットでは分からない、子育ての実践モデルであり、発達過程の参照例です。子どもを寝かせるちょっとしたコツや、離乳食の硬さや温度を實際触ることで知るなど、ヒントに満ちあふれているのです。子育ての実践モデルを前に保護者（親）は、気づき安心するでしょう。そして自分の子育ての疑問点や不安が解消され、子育てに自信が持てるようになっていきます。周囲の支えがある中で子育てを楽しんでいる保護者（親）の姿を、子どもが直に受けとめることとなり、健やかな育ちにつながっていきます。

そして、保護者（親）自身が他の保護者（親）に対して支援したいという気持ち、意欲もわいていくことに連なります。

保育所は、保育所保育を起点として、自らの特性を地域に“おすそ分け”することが、地域子育て支援の出発点になります。

[現場からの声]

- ☞ 実際に親子の変化を目のあたりにしたり、保育士の行為に対して感謝されたりすると、地域子育て支援の必要性を実感する。保育士にとってあたり前のことでも、すごく感謝されることがある。
- ☞ 保育士にとって園児やその親はよく知っているが、在宅の親子については知識があまりないかもしれない。しかし「新入園児のような親子が街中にあふれている」ことをイメージして、新入園児やその親に対する支援や声かけを参考にしよう。
- ☞ 子育てサロンは交流の場を提供するだけで、助け合うのは保護者相互である。スタッフが手取り足取り何かをすることよりも、母親同士がコミュニケーションをはかれる場を提供することが効果的であると実感している。
- ☞ 何時になったら何をするとといったプログラムはあえて設けないことが、親の主体性を引き出すことにつながる…「運転席には座らないで助手席に座る」姿勢が大切である。

第3節 保育所が地域の主体や人材と協働する意義

本調査研究事業では保育所が単独で地域子育て支援に取り組むのではなく、地域内にいるさまざまな人や団体と連携・協働して進める仕組みを研究した。先進的に取り組みんでいる保育所からは、多様な主体・人材と連携・協働することの意義について以下のような意見が出された。

(1) 子育ては地域みんなの責任

子育ては保護者（親）だけで行うことができるものではなく、また保育所がすべてを担えるものでもありません。子どもは地域・社会で育つ、だから地域社会の構成員がそれぞれ、特性を活かしながら支えていく責任があると考えべきです。

[現場からの声]

- ☝ 子育ての責任をすべて保護者だけにゆだねることはできない。地域全体の責任として、社会の構成員がそれぞれ責任を持って取り組むべきである。

(2) 関わった人が成長していく

子育てに関わることは、子どもだけでなく関わった人全員の成長（豊かさを受けとめる）につながります。次世代育成という観点から考えても、年齢・世代を超えて、いろいろな人が携わることによってその意味があります。

[現場からの声]

- ☝ 地域の人材・ボランティアとの連携についての意義は、子育てに幅広い年齢層の人びとが関わるという点で、異世代交流を実現するもので、重要と考えている。小中学生や高校生が子育てに関わることは、園児だけでなく、小中学生・高校生の育成(次世代育成)にもつながる。
- ☝ 子育ては人の育ちでもある。年齢に関係なく、地域住民に保育に関わってもらうことで、園児のみならず、地域住民も成長することができる。地域における「人の育ちの場」として保育所を位置づけている。

(3) 量・質の面で豊かになる

一保育所ですることには限りがあります。量的な限りだけではありません。たとえば、専門性のある保育士ができることと、子育てしている保護者（親）と同じ立場の人ができること、子育てを卒業してから時間が経っている人ができることには、質的な違いもあります。

いろいろな主体が子育てに関わることで、量的な拡がりだけでなく、質的な拡がりも生まれます。子育ての発達の経過、そして状況に応じて変わる子育て家庭のニーズに対して、1つの方向からではなく、複数の方向から支援をすることが有効です。

そして、地域子育て支援に携わる主体が増えることで、地域全体が保護者（親）と子どもにあたためていままなごしを投げかけるようになるでしょう。

[現場からの声]

- 地域の子育て支援活動は、保育所だけでいろいろ欲張ってもできない。子育ては地域で取り組むべきテーマであり、さまざまな主体が自分たちの専門性やできることを活かす形で関与すればよいと考えている。
- 最初は保育所が地域子育て支援をするのだという意識が強かったが、保育所がすべてできるわけでないし、それでは本当の意味の子育て支援ではない。地域の皆が親子に対してやさしくなれることが重要で、保育所だけが頑張るのではなく、地域のあちこちで並行して地域子育て支援を行うことがそのゴールにつながる。
- 地域には子育ての課題をすべて保育所に担ってほしいというニーズがある。しかし、保育所が持つリソースだけではすべて対応できないので、専門性を持った地域の主体と連携することが必要になる。
- 在宅の子育てしている家庭の子どもをとりまく環境は不十分な部分が多い。そうした部分を改善するためには地域の多様な資源が必要だが、中でも保育士という保育の専門職を有する保育所の役割は重要であると認識している。しかし、保育所としては在園児の保育でマンパワー的には手一杯の状況であり、なかなか地域の子育て支援まで関与することはできない。
- 保育所のマンパワーではまかないきれない部分を地域の人材・ボランティアに担ってもらっている部分もある。

(4) 保育所を知ってもらえる、知ることができる

多様な主体との接点ができることで、保育所の取り組みや役割を地域の人たちに知ってもらえることができます。そうなることで、保育所の今日的な役割を知ってもらえるとともに、地域に応援団が増え、保育所が地域から支えられることにつながるのです。

また保育所関係者が、在園児の保護者と子どもの姿は知ることができても、在宅で育つ子どもの姿を知ることはあまりありません。保育士が地域の子どもの育ちを支援するなかで、あらためて在園の子どもの育ちについても考える機会となります。

そのため、多様な主体を通じて知る地域の情報や保育所で行う在宅子育て家庭への子育て支援は、今一度、子どもの育ちについて考える機会となり、保育所を知ってもらう契機となるのです。

[現場からの声]

- ☞ 地域の人材・ボランティアの保育所への受入れは、地域の中で保育所が何をやっているかを地域の人に知ってもらうために必要である。
- ☞ 地域の情報や、家庭で育つ子どもの姿についての情報などを得られ、地域とのつながりができることのメリットが非常に大きい。



地域の子育て支援というと、一般に「園庭開放」をすること、「育児相談」を行うこと、「一時保育」を行うことなどのメニューと捉えられがちである。たしかに、地域子育て支援事業として、そうしたメニューに取り組むことが必要とされる。

しかし、ヒアリングから得られた回答からは、保育所保育そのものが地域の子育てに連なる本質的な意義であることが見ることができた。それは、保育所での子どもたちの生活が、子育てを通してのまちづくりに連なっていること、つまり保育所の存在意義が、次世代を育成する地域の未来づくりの拠点として位置付けられるということである。また、保育所の乳幼児の発達を支援するための環境や、保育士の専門性は、在宅子育て家庭にとっては重要な資源であり、子育てのモデルとなりうるものである。特別に「何かをする」というよりも、日常的な保育の営みに気軽に参加できるような仕掛け（開放）をしていくことで十分対応できるというものであった。さらに、そうした地域住民と接点を持つことによって保育所が得るものは大きく、保育士の保育観・子ども観の広がり、地域情報の拡大、地域の住民から保育所の存在の理解、保育所の応援団を増やしていくなどがあげられる。

このように、園児以外の地域の子どもや保護者(親)にも目を向け、また保育所だけすべてを担うのではなく地域の主体と歩みをともにしながら、在宅子育て家庭の支援をしていくことに大きな意義があるといえる。